

家ノ後遺跡の晩期初頭土器

—— 入組帯状文と入組三叉文 ——

谷 地 薫

1 はじめに

家ノ後遺跡は秋田県大館市南部の曲田字家ノ後96-2外にあり、米代川右岸に形成された中位の河岸段丘上に立地する。遺跡範囲は西に向かって張り出す舌状台地上（標高91～92m）から段丘崖の急斜面及び段丘下の沖積地（標高76～77m）にかけての広い範囲にわたっている。その一部である台地縁辺部と斜面（2,800㎡）は、平成3年6月10日から11月15日まで、秋田県教育委員会によって発掘調査された。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡4軒・土坑112基・溝状遺構2基・焼土遺構5基・性格不明遺構2箇所を検出し、縄文土器・土製品104,822点、石器類5,628点が出土した。竪穴住居跡は台地上の縁辺部にある。土坑のうち45基は、ベンガラ散布・形態・埋土の状態・遺物出土状況から、縄文時代の土壌墓と考えられる。これらの土壌墓は台地南縁の張り出し部に3～11基の群を形成する。また、4基の土坑は縄文時代の粘土採掘坑と考えられる。遺構内からは比較的良好な状態の一括遺物が出土している。台地上では建物群の存在を想定させるような柱穴群を検出した。

台地の縁辺部は、突出部分と小さい沢目とが波状に連続し、その沢目から沖積地にかけての斜面には特に遺物の多いところが2箇所あって、一方には2層、他方には6層の遺物包含層が形成されており、縄文時代の捨て場と考えられる。

既に発掘調査報告書が刊行されているが、報告書作成の時間的問題があって、出土土器については時期が後期末から晩期前葉としているのみで詳細な記述はほとんどない。^(註1)

本稿では、層位的に取り上げてある捨て場出土土器と遺構内出土土器の入組帯状文系、玉抱き三叉文系、入組三叉文系の文様を対象とし、その文様変遷を検討することによって、縄文晩期前葉土器の主要な文様である入組三叉文の発生過程を明らかにし、家ノ後遺跡出土土器の編年の位置付けにも言及したい。尚、挿図中の遺物番号は報告書の遺物番号をそのまま使用する。

2 家ノ後遺跡出土土器の再整理

(1) 遺構内出土土器 (第1図、図版1・2)

出土状況から前後関係が判明するものと、その他の遺構から出土した文様のはっきりしている土器を対象とする。

① S I 95A・B 竪穴住居跡出土土器 (第1図1・4・14・15・29・33、図版1)

S I 95B 竪穴住居跡の後でS I 95A 竪穴住居跡が営まれており、S I 95B 床面→S I 95B 埋土下層→S I 95B 埋土上層→S I 95A 床面→S I 95A 埋土の順に新しい。

S I 95B 竪穴住居跡床面出土の台付深鉢33 (図版1) は、クランク形で中央部に入組部をもたず上下両端に入組部が付く1段の入組帯状文が胴部中央に、頸部には2段の入組帯状文のモチーフながら文様を区画する沈線がしっかり接続せず、縄文充填部と無文部の区別が不明瞭で混乱している入組帯状文が施文されている。区画沈線の入組部は三叉文状に広がっている。S I 95B 竪穴住居跡埋土下層出土の深鉢29 (図版1) は胴部中央と頸部に2段の入組帯状文が描かれている。膨らんだ帯状部どうしの上下が接触し、頸部のほうでは入組部の両脇に三叉文が付加されている。S I 95B 竪穴住居跡埋土上層出土の14は入組帯状文らしきモチーフが無文地にやや細い沈線によって描かれている。15は入組三叉文が施文されている。

S I 95A 竪穴住居跡床面出土の1は口縁部がやや内湾する台付深鉢で、細い沈線でクランク形の入組帯状文が描かれていると思われる。S I 95A 竪穴住居跡埋土出土の4は入組三叉文と弧状文が施文されている。

② S K 58土坑出土土器 (第1図99・102・103・104・105・106・107・131・133・135・147)

S K 58土坑は埋土のやや下部に炭化物層があり、遺物はその上下で分けられる。下層から出土した133、131、147には入組帯状文、136には三叉文が施文されている。上層から出土した104、107、105、106には入組三叉文が、99、102、103には入組帯状文が施文されている。

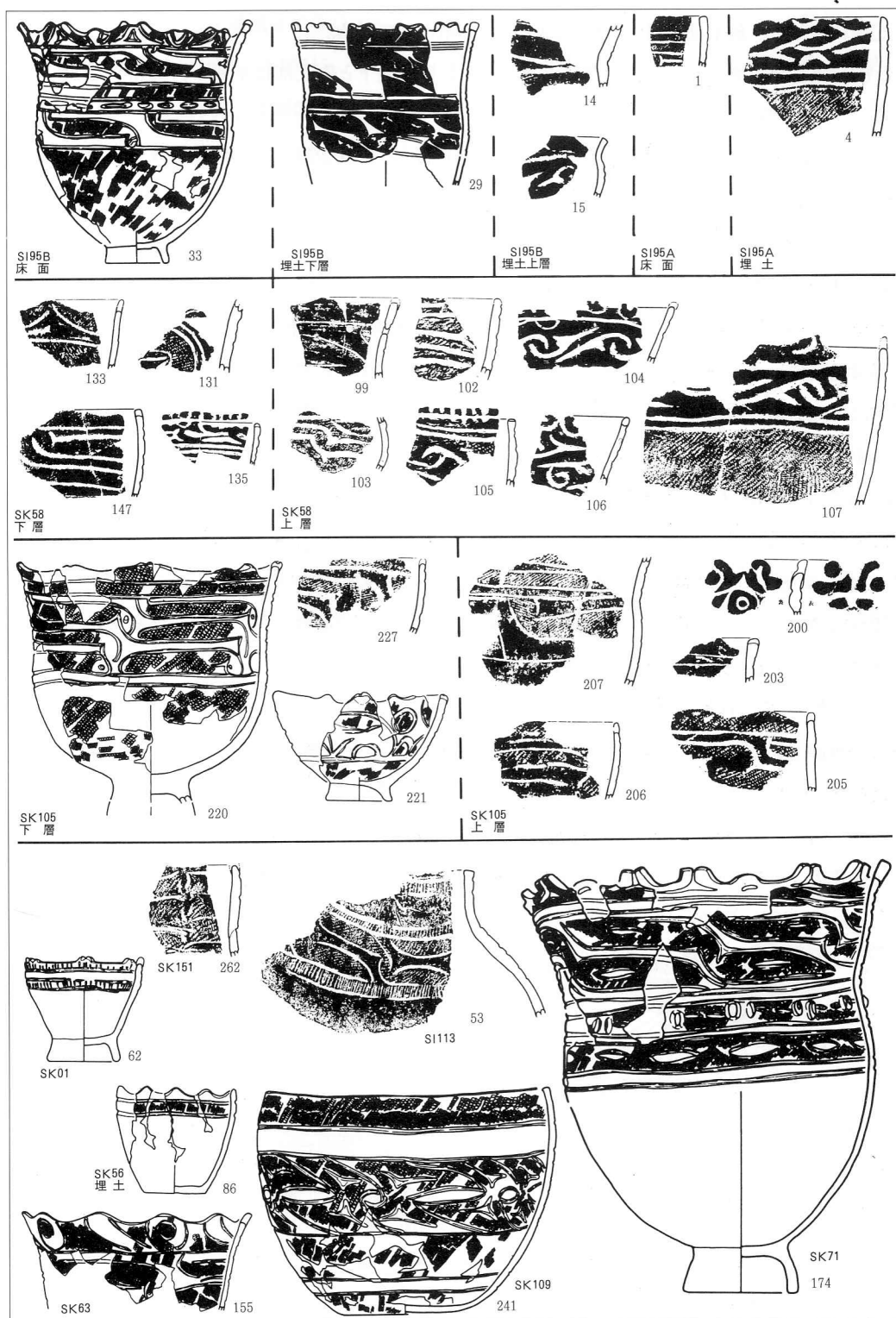
③ S K 105土坑出土土器 (第1図200・203・205・206・207・220・221・227、図版1)

S K 105土坑は埋土中に焼土層があり、遺物はこの層の上下で分けられる。

下層出土の220 (図版1) は3段の入組帯状文が描かれ、刺突が施される入組部によって帯状部が分断されている。221は縦に入り組む弧線と円形文が描かれている。下層出土の227と上層出土の205には比較的太い沈線で入組帯状文が、上層出土の207、203、206には細い沈線でやや変形した入組帯状文が描かれている。200は玉抱き三叉文である。

④ その他の遺構出土土器 (第1図53・62・86・155・174・241・262、図版1・2)

S I 113 竪穴住居跡出土の53 (図版2) は、肩部にキザミ目文帯で区切られた文様帯をもつ壺である。やや変形した2段の入組帯状文が描かれている。帯状文の上下が文様帯を区画する

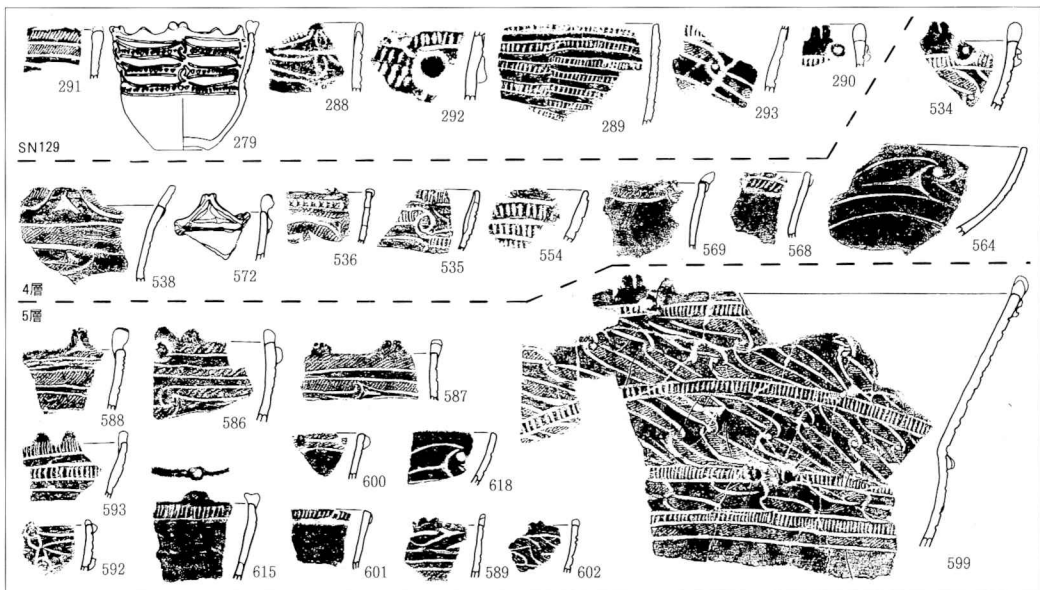


第1図 遺構内出土土器 (33、29、220、221、62は1/6.7、他は1/5)

5層からS N129焼土遺構までのいずれにもしっかりした入組帯状文は少なく、入組帯状文から変化した横位帯状文（5層615、4層554、S N129焼土遺構289図版2）や、入組部が巻き込む形のもの（5層586、4層535）、向き合う2本一組の短弧線になるもの（5層592、S N129焼土遺構279、288図版2）が含まれている。また、入組部に刺突を施すものがあり（5層618、599、4層564、534、S N129焼土遺構293図版2）、5層と4層からは、巻き込む形の入組部と刺突が結合して、玉抱き三叉文に近い文様になるもの（5層618、4層564）もある。5層599は口縁部に突起があり、その右下のキザミ目文帯上に中心に刺突のある貼瘤がある。キザミ目文帯に挟まれて、入組部に刺突のある変形した細い入組帯状文が多数描かれている。なお、この土器は4層534、S N129焼土遺構290、293は同一個体と考えられる。

② 捨て場2（第4～6図、図版1・2）

NOライン土層図（第2図）によって4-a層から6-c層まで6層に分けられている。しかし斜面では4-b層と5層が主で、4-a層、4-c層、6-a層は斜面下部にのみ認められた。6-c層の遺物は少量で、多くはNM47・48グリッドのトレンチ内下部に集中する。したがって斜面上部と斜面下部を同一に扱って4-a層～6-c層を単純な前後関係とすることはできない。改めて写真等で見ると4-b層上面は4-c層と6-a層の境界に連続し、明瞭に判別できる。また、NPグリッド東側～NRグリッドには斜面に大きな沢が入り、その埋積土中に多量の遺物が包含されていた。遺物取り上げの層位はNOライン土層図に対応させて4-a層～6-a層としてあるが、捨て場の形成過程と広がりとは異なると考えられるので、NNグリッド～NPグリッド西側に堆積する4-a層～6-a層とは区別して扱った方がよいと思わ



第3図 捨て場1（4層・5層）、S N129焼土遺構出土土器（279は1/8 他は1/6）

れる。そこでNOライン土層図と遺物出土層位との対応関係の确实性を増すために、捨て場2の遺物のまとまりを次の二つに分割する。

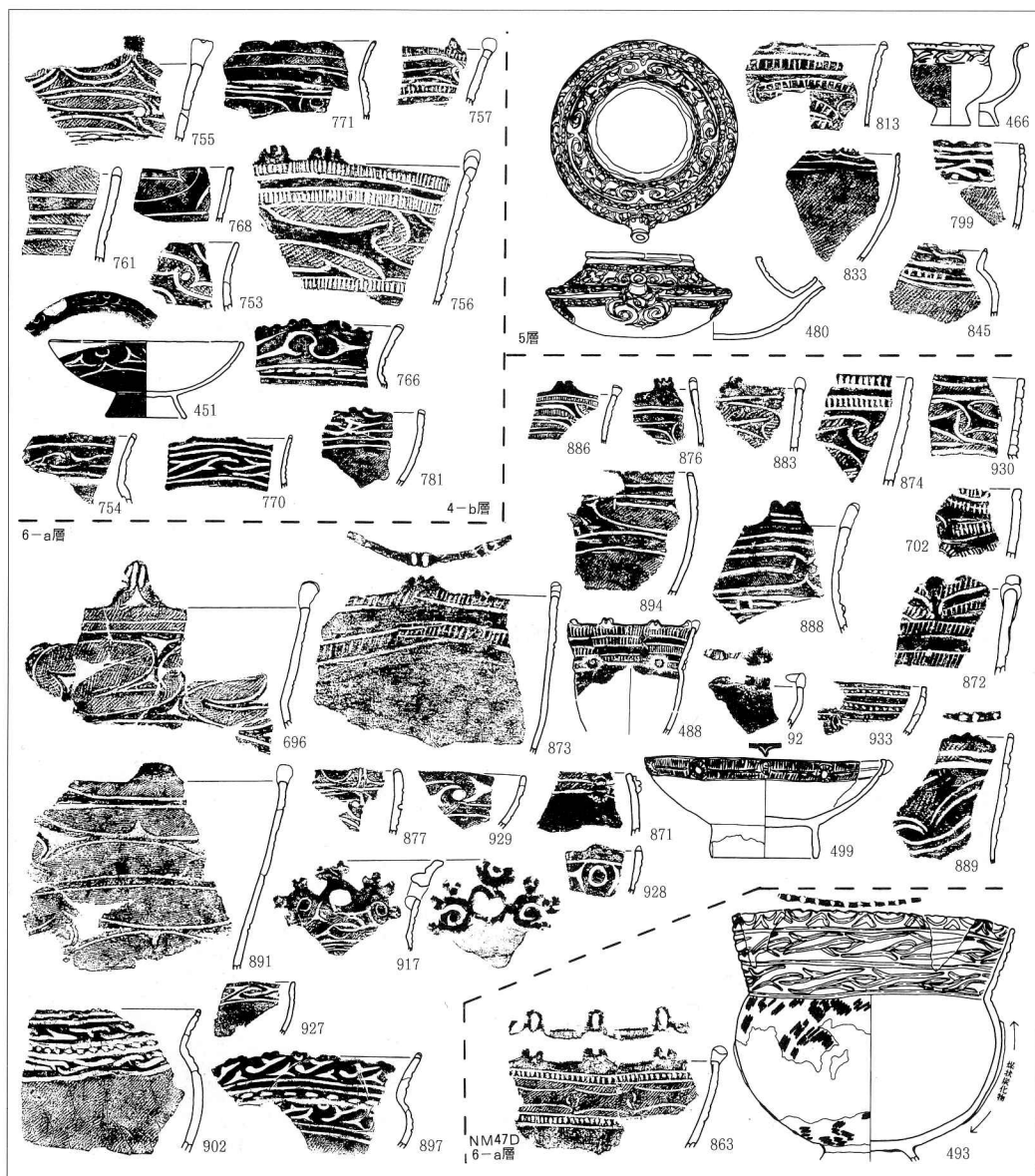
捨て場2-ア：NOライン土層図と対応する範囲として確実なNO47～50グリッド及び

NN48、NP48B・D

捨て場2-イ：NPグリッド東側～NRグリッドの大きな沢の範囲（NR50・51、NQ

47・50、NP47A・C、NP49)

a. 捨て場 2 - ア (第 4 図、第 5 図、図版 1・2)



第4図 捨て場2-ア出土土器(1) 6-a層~4-b層 ($\frac{451}{488}$ 、 $\frac{480}{499}$ 、 $\frac{466}{493}$ は1/8、他は1/6)

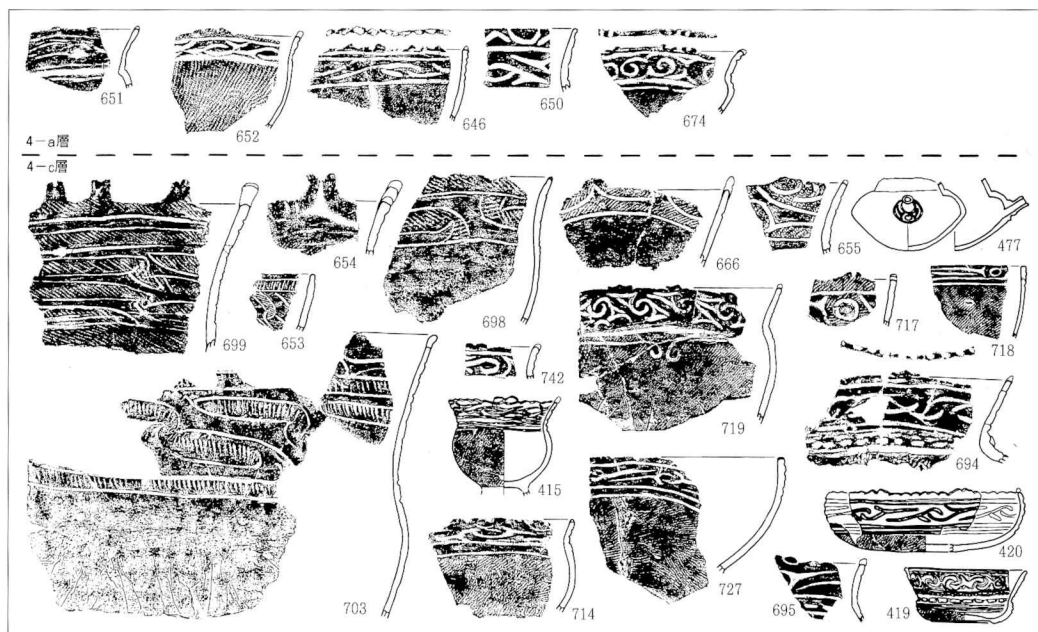
斜面上部～中部の4-b層上面が斜面下部の4-c層と6-a層の境界に対応すると考えられるので、大きくは4-a層・4-c層と4-b層・5層・6-a層に分けられる。

6-a層では入組帯状文(874・876・830・883・886・889・894)、三叉文が入る変形入組帯状文(891)や連続区画文(696=890図版2)、変形入組帯状文(702・888)、横位帯状文(488・499・871・872・873・923・926)がある。入組部に刺突が施されたり(877・929)、短弧線化した入組帯状文(933)もある。玉抱き三叉文(928)、玉付き三叉文(897)、入組三叉文(902・917・927)も少量含まれる。NM47Dのトレンチでは、入組部が短弧線化し、帯状部の区画沈線が省略されて弧線文状になった変形入組帯状文(863)と、文様帯の中央部が区切られ入組三叉文が2段に施文されるもの(493図版1)がある。

5層、4-b層も6-a層と大差なく、入組帯状文(5層813、4-b層755・756・761・768)、変形入組帯状文(4-b層771・757)、入組三叉文(5層799・845、4-b層754・770)がある。その他に、入組三叉文の祖型というべき入組文(5層781、4-b層466・833)、末端が渦巻状になる複雑な三叉文(5層480)、入組部の先端が連結した連結三叉文(4-b層766)もある。

4-c層は入組帯状文(653・654・698・699・703)、その変形種(666・655)、玉抱き三叉文(447・717・718)、入組三叉文の変形種(719・742)、入組三叉文(415・420・694・695・714・727)という種類は変わらない。入組三叉文の変形種、入組三叉文が多く入組帯状文は減少する。入組帯状文は細い沈線によって粗雑に描かれている。

4-a層では入組帯状文、玉抱き三叉文はなく、入組三叉文(646・650・651・652)と末端



第5図 捨て場2-ア出土土器(2) 4-c層・4-a層 (477、415、420、419は1/8、他は1/6)

が渦巻状になる三叉文(674)がある。

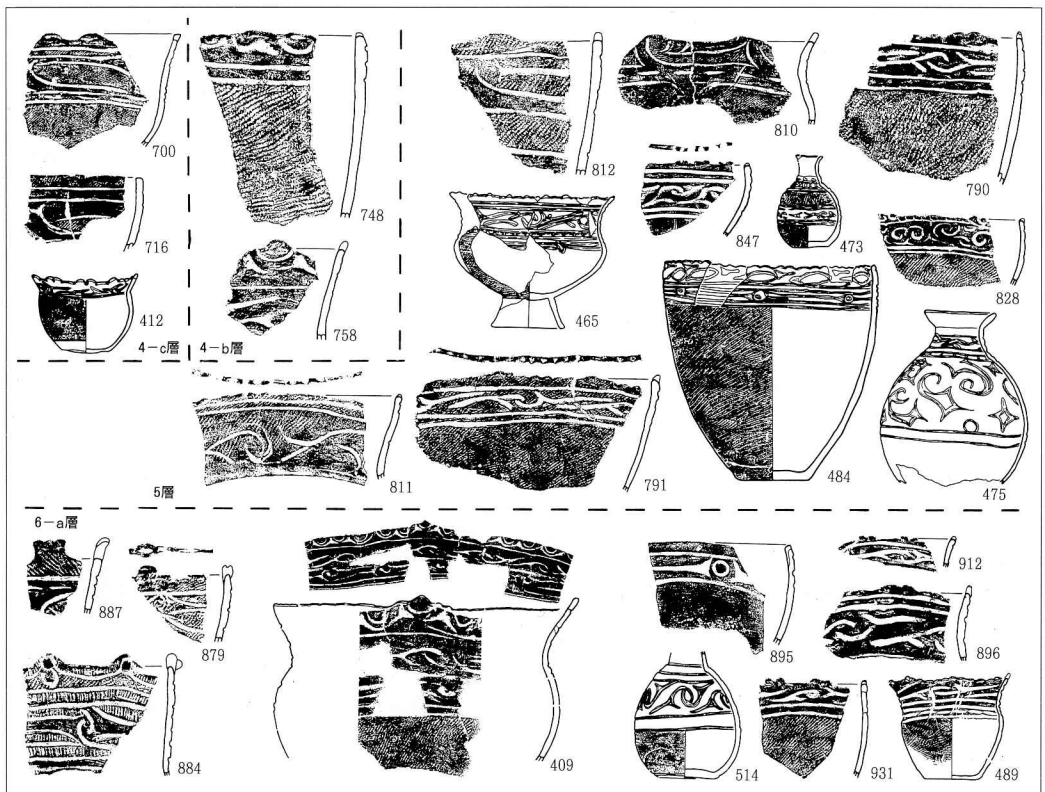
b. 捨て場2-イ(第6図、図版1)

出土量からみれば6-a層、5層が主である。5層は斜面上部に、6-a層、4-b層、4-c層は斜面下部に分布の中心がある。

6-a層では入組帯状文(879・887)、その変形種(884)、玉抱き三叉文(409・895)、入組三叉文の変形種(514)、入組三叉文(489図版1・896・912・931)がある。884は入組部が深く入り組み接続する。409では玉抱き三叉文、入組三叉文、玉付き三叉文が共存している。

5層は入組帯状文(812)、その変形種(484・810)、玉抱き三叉文(484=796)、入組三叉文の変形種(473・811)、入組三叉文(465・790・791・847)がある。入組三叉文の祖型とみられる渦巻き状に深く入り組むもの(811)、右側の入組部が半円状になるもの(465・791)がある。また、両端が渦巻き状になる三叉文(828)や、入り組む弧線文、三叉文、菱形文、円形文を組み合わせているもの(475)もある。

4-b層、4-c層は点数が少ない。4-b層では玉抱き三叉文(748・758)が出土している。4-c層では入組帯状文の変形種(700・716)、入組三叉文の変形種(412)がある。



第6図 捨て場2-イ出土土器 6-a層～4-c層(412、465、473、484は1/8、他は1/6)

(3) 捨て場各層と遺構内出土土器の対応関係

これまでみてきた土器の文様は、入組帯状文系（入組帯状文、その変形種である三叉文付き入組帯状文、三叉文付き連続区画文、入組部が渦巻き状や向き合う短弧線になる入組帯状文、入組部に刺突を施す入組帯状文、横位帯状文など）、入組三叉文系（入組三叉文、その変形種である入組部が深く渦巻き状に入り組むもの、端部が三角形や菱形に区画されるもの、連結入組三叉文、玉付き入組三叉文など）に大別できる。また、玉抱き三叉文系は、入組帯状文系のうちの三叉文付き入組帯状文や入組部に刺突のある入組帯状文に類似するものから、沈線によって描かれ入組三叉文に類似するものまである。入組帯状文と入組三叉文の中間的文様として分けておく。

第1表は、以上の3大別した文様系と捨て場毎の層位別出土傾向を模式的に表したものである。これと個々の文様の類似性から、

第1群：捨て場1の5層・4層・S N129焼土遺構と捨て場2－アの6－a層

第2群：捨て場2－アの5層・4－b層、捨て場2－イの4－c層・4－b層

第3群：捨て場2－アの4－c層・4－a層と捨て場2－イの6－a層・5層

とまとめることができる。

次に遺構内出土土器と第1～3群を対比すると以下ようになる。

第1群：S I 95B 竪穴住居跡床面(33)、S I 95B 竪穴住居跡埋土下層(29)、S K 58土坑下層(131・133・135・147)、S K 105土坑下層(220・221・227)、S K 105土坑上層(200・

203・205・206・207)、S I 113竪穴住居跡(53)、S K 01土坑(62)、S K 56土坑埋土(86)、S K 63土坑(155)、S K 109土坑(241)、S K 151土坑(262)

第2群：S I 95B 竪穴住居跡埋土上層(14・15)、S I 95A 竪穴住居跡床面(1)

第3群：S I 95A 竪穴住居跡埋土(4)、S K 58土坑上層(99・102・103・104・105・106・107)

尚、S K 71土坑出土土器(174)は、入組帯状文の中にレンズ状の無文部が残る。これは弧状の帯状文が上下に入り組む後期後葉の文様要素が残存しているもので、第1群よりも古く見るべきと考える。

以上の遺構内出土状況からも、第1群→第2群→第3群と変遷する捨て場での層位的出土状況は確かめられる。ただし、第2群については、遺構内出土土器が数少ないこと、層位的

文様系		入組帯状文系	玉抱き三叉文系	入組三叉文系
出土位置				
S N129焼土遺構		◎	○	
捨て場1	4層	◎	○	
	5層	◎	○	△
捨て場2－ア	4－a層			◎
	4－c層	○	○	◎
	4－b層	◎	○	○
	5層	○		○
捨て場2－イ	6－a層	◎	○	△
	4－c層	△		△
	4－b層		△	
	5層	○	○	◎
	6－a層	○	○	◎

◎ 多い ○ 普通 △ 少ない 無印 ない

第1表 各文様系の出土傾向

に第3群と明瞭に分けられるかどうか疑問なことから、明確に独立した群として扱うことできないと思われる。以下では、層位的にも遺構内出土状況からもまとまった群として把握できる第1群と第3群に絞って検討することとする。

3 晩期初頭の土器文様と家ノ後遺跡出土土器

(1) 入組帯状文から入組三叉文への変遷過程 (第8図、第9図)

家ノ後遺跡第1群土器の主要な文様である入組帯状文から、第3群土器の主要な文様である入組三叉文に変遷する過程については、既に幾つかの見解が示されている。

安孫子昭二氏、小井川和夫氏は、入組帯状文の入組部に刺突が施され、それを挟むように入組部の外側が三叉文化して玉抱き三叉文が生まれ、その後中央の玉が一方の沈線に吸収されて入組三叉文や連結三叉文^{(註2)(註3)}になるとする。

須藤隆氏は、玉抱き三叉文から渦巻き文的な複雑な入組三叉文になり、さらに入組三叉文が派生^(註4)するとしている。

つまり、安孫子氏、小井川氏、須藤氏ともに入組三叉文の成立にはその前提として玉抱き三叉文が不可欠だとしているのである。

ところが、中村大氏は、北東北では大洞B1式段階で玉抱き三叉文を経ずに直接入組帯状文から入組三叉文が発生すると指摘^(註5)している。その過程は、「入組部の上下の弧線が膨り広げられ、弧線同士が入り組む格好になる入組帯状文の入組部を抜き出し、単位文様として独立させることによって、入組三叉文が成立する」、「単位モチーフの傾きが祖型とする入組帯状文の傾きと逆になる場合が多い」のは、「文様施文時における利き腕に起因する」としている。

文様モチーフに限って言えば、家ノ後遺跡第1群土器はこの問題を解決してくれそうである。つまり、第1群土器には、入組帯状文から、玉抱き三叉文を経ずに直接入組三叉文に変化する途中段階の文様が多種含まれていると考えるのである。それは以下のような変遷をたどる。

入組帯状文の上下が文様帯の上下を区画する沈線に接して、最上部と最下部の沈線が省略される。

- 入組部の弧線が独立し、入り組んで向き合う短弧線によって表現される。
- 帯状文を区画する沈線の接続が不完全になり、沈線が独立して描かれる。
- 沈線どうしが新たな形に連結し、多様な文様が描かれる。
- 沈線によって入組三叉文の祖型が描かれる。

このような過程を経て縄文やキザミ目文の充填される区画文である入組帯状文から、沈線文である入組三叉文へと変化するのである(第2表、第7図)。

さて、S N129焼土遺構出土の279（第3図、図版2）は、入組帯状文の本来の形が変形し、沈線文化したもので、本来キザミ目が充填されるべき部分とは逆の部分にキザミ目を充填している。この部分が三叉文化して、単位文様とするだけでも入組三叉文に近い文様となる。中村氏はこのような入組部を抜き出して単位文様とする手法を「トリミング」と命名している。しかし、これだけで入組三叉文の成立を説明するのは不十分であると思われる。^(註6)

入組三叉文の入組部とは反対側の端部が上下に重なる2本の沈線となることから考えれば、充填部の反転から直接入組三叉文が出現するのではなく、一度沈線文化した中から、新たな沈線の組み合わせとして入組三叉文が出現すると考えるのである。

また、入組三叉文が入組帯状文とは逆の傾きになるのは、例えば右下がりの入組帯状文では、入組部右側の短弧線が右隣の単位の帯状部を区画する長弧線と、入組部左側の短弧線が左隣の単位の帯状部を区画する長弧線と結合し、必ず段差をもつことに由来する。左下がりの入組三叉文の右側部分で、上方に延びる短沈線は上段の入組帯状文の下部を区画していた沈線である。同様に、左側部分で下方に延びる短沈線は、下段の入組帯状文の上部を区画していた沈線である。^(註7) 中村氏のいう利き腕の問題は、入組三叉文が土器文様として確立して行く過程では主要な要因ではないと思われる。

入組三叉文の中で、入組部が渦巻き状に深く入り組み一部が接続するものもある。これは玉抱き三叉文が入り組んで中心の玉が省略されたものではなく、入組帯状文の入組部が2本一対の短弧線になったものから派生するものであろう。入組帯状文から入組三叉文への過渡的形態の一種である。

玉抱き三叉文は、安孫子氏、小井川氏、須藤氏、中村氏も指摘するとおり、入組帯状文の入組部に刺突が加えられた形態から派生する。玉抱き三叉文は、その構造上、完全な沈線文でなく、三叉文部分が三叉形の区画文であっても描くことができる。したがって完全な沈線文である入組三叉文よりもやや先行して成立すると思われる。そして入組三叉文の祖型とみられる沈線文等と並存し、入組三叉文が確立するに伴って、波状口縁部の突起部に残ったり、玉付き三叉文や玉付き連結三叉文としてその名残りをとどめる。

（2） 第1群、第3群土器の編年の位置付け

前節では第1群土器の中に含まれるさまざまな文様の生成過程を考えることで、入組帯状文から直接入組三叉文が成立することを明らかにした。そして玉抱き三叉文もその過渡的文様として出現することが分かった。それでは、家ノ後遺跡出土の第1群土器、第3群土器はどこに編年されるべきなのであろうか。

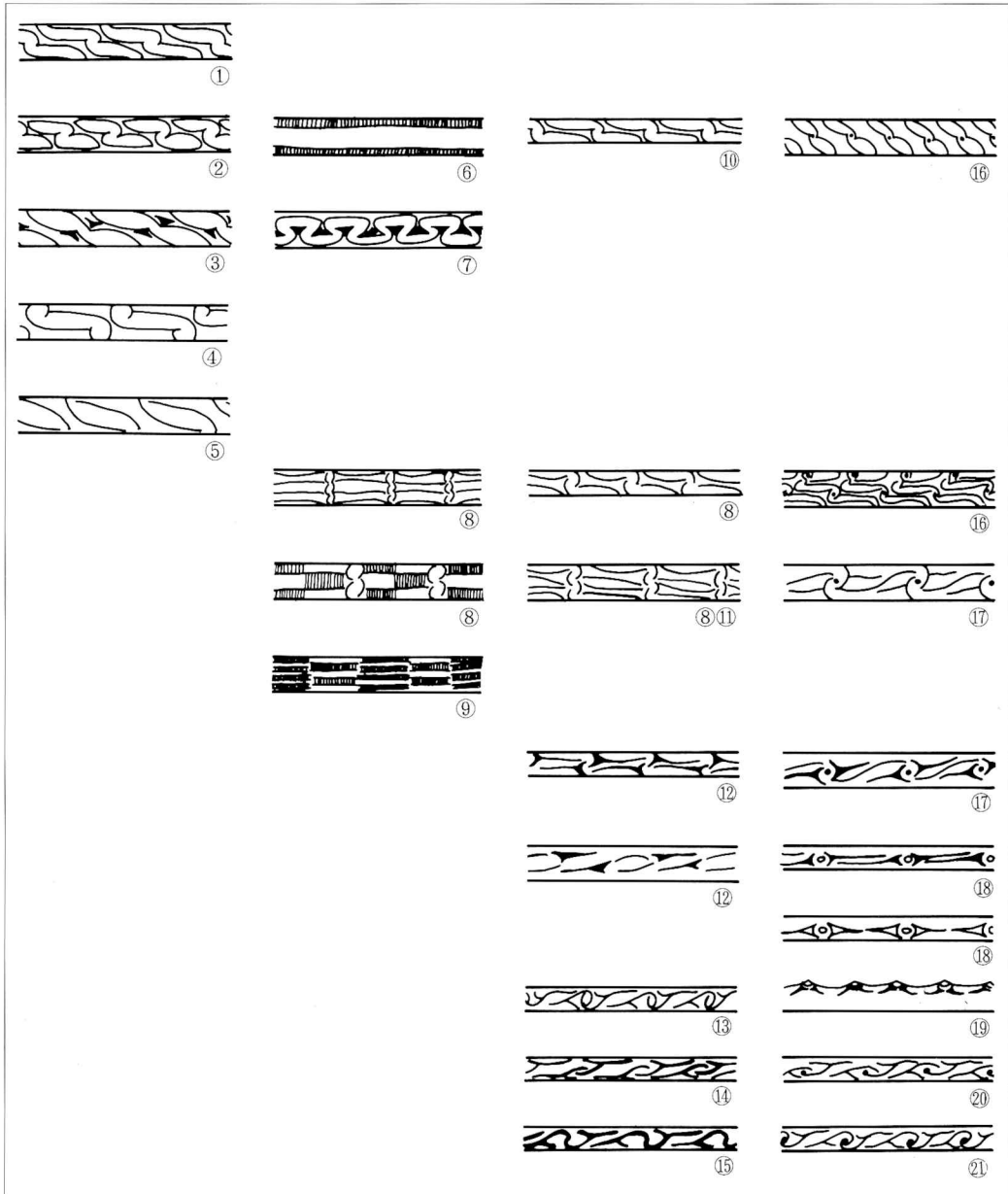
山内清男氏の大洞B式の基準資料（大洞貝塚B地点出土資料）を須藤隆氏が紹介しているが、^(註8) それによれば、S I 95 B 堅穴住居跡床面出土土器（33）等を除く家ノ後遺跡第1群土器と第3

分類	文様表現	入組	帯状文	入組三叉文系	玉抱き三叉文系
区画文	沈線で区画された縄文帯やキザミ目文帯によって入り組んで連続する文様を描く。	①入組帯状文 ②帯状部が膨らみ、上下に隣接する帯状部どうしが接近して、入組部の両側が三角形に近い形になる。 ③帯状文と帯状文のすき間に入組部を挟むように三叉文が描かれる。 ④一段の入組帯状文の入組部が不明瞭になり、クランク形の区画文が描かれる。 ⑤粗末な細い沈線で形の崩れた入組帯状文が描かれる。	⑥文様帯の上下を区画する横位帯状文のみが描かれる。 ⑦膨らんだ帯状文が上下で接続し、連続した文様になる。	⑩帯状文の上下が文様帯の上下を区画する沈線に接して、最上部と最下部の沈線が省略される。	⑯入組部の中心に刺突文が施される。
解体途中の区画文	帯状文を区画する沈線の接続が不完全で、沈線が独立して描かれる。 入組帯状文にとられない文様も描かれる。 帯状文の縄文やキザミ目が充填される部分の境界が不明瞭になる。		⑧入組部と帯状部が分離し、横位帯状文の中に一对の短弧線文が挟まれる文様が描かれる。 ⑨多段の横位帯状文が描かれる。	⑪入組部の弧線が孤立し、入り組んで向き合う短い弧線によって表現される。 ⑫入組部の弧線が孤立し、入り組んで向き合う短い弧線によって表現される。 ⑬縄文やキザミ目が全面に施文されるもの、無文部と充填部が逆転するもの、無文で沈線だけが描かれるものがある。 ⑭沈線どうしが新たな形に連結し、多様な文様が描かれる。入組三叉文の粗型に近い文様も描かれる。	⑰入組部の中心に施文された刺突を取り囲むように沈線が連結し、玉抱き三叉文の粗型が描かれる。 ⑱玉抱き三叉文
沈線文	沈線や彫り込みによって文様が描かれ、縄文やキザミ目の充填はあまり用いない。			⑮沈線によって入組三叉文の粗型が描かれる ⑯入組三叉文 ⑰連結三叉文 羊歯状文の粗型 羊歯状文	⑲突起部の円文を囲む玉抱き三叉文 ⑳玉付き入組三叉文 ㉑玉付き連結三叉文

第2表 文様の変遷過程概念表

群土器は大洞B式に含まれる。

須藤隆氏は、宮城県中沢目貝塚、岩手県前田遺跡の資料などを用いて晩期初頭土器の細分^(註9)を行い、大洞B1式に対応する晩期Ⅰa期、大洞B2式に対応する晩期Ⅰb期を設定している。その中で、晩期Ⅰa期の主要な文様は「複雑な入組文」、「魚眼状三叉文」（玉抱き三叉文）、晩期Ⅰb期の主要な文様が「入組三叉文」、「羊歯状文の祖型」、晩期Ⅱ期の主要な文様は「入組三叉文」、「羊歯状文」であるとしている。それに単純に当てはめれば家ノ後遺跡第1



第7図 文様の変遷過程模式図（番号は第2表と対応する）

群は晩期Ⅰa期になりそうである。また、第3群土器は、晩期Ⅰb期の内容が不明確で、晩期Ⅰb期と晩期Ⅱ期の区別は理解し難いが、おそらく晩期Ⅰb期ということになりそうである。はたしてそうであろうか。

北東北における該期の良好な一括出土資料として、岩手県九戸村道地Ⅲ遺跡FⅡ-9住居跡(註10)一括出土土器と、玉山村前田遺跡1号竪穴住居跡出土土器(註11)がある。

道地Ⅲ遺跡FⅡ-9住居跡一括出土土器の台付き深鉢には、最下部の区画沈線が省略されて入組帯状文の下部が文様帯を区画する沈線と一体化した変形入組帯状文が施文されている。これと共伴する台付浅鉢と注口土器には入組部が深く入り組んで接続する入組三叉文と玉抱き三叉文が描かれている。家ノ後遺跡第3群土器とよく似た様相であるといえる。

玉山村前田遺跡1号竪穴住居跡出土土器と家ノ後遺跡第1群土器とを比較すると、3b層・3c層出土土器には、入組部の弧線が独立し、入り組んで向き合う短弧線によって表現されるものや、帯状文を区画する沈線の接続が不完全になり、沈線が独立して描かれるものは含まれていない。入組三叉文系の文様も見当たらない。家ノ後遺跡ではSK71土坑出土土器に近く、第1群と比較するとより古い様相といえる。これらの土器を晩期Ⅰa期の標準的資料として扱っている須藤氏自身も、以前は岩手県西根町向新田遺跡出土土器などとともに後期最終末としていたことが(註12)ある。また、2層出土土器には入組帯状文系の文様が全く含まれていない。家ノ後遺跡第3群土器よりも新しい土器群と考えられる。須藤氏も述べているとおり、1a層出土土器とは明確に区別し難く、晩期Ⅰb期として分離するとしても極めて晩期Ⅱ期に近い時期であろう。したがって前田遺跡1号竪穴住居跡出土土器には3b層・3c層と2層の中間で、家ノ後遺跡第1群土器、第3群土器と対比できる部分が欠落していると考えられる。

以上から、前田遺跡1号竪穴住居跡床面出土土器→前田遺跡1号竪穴住居跡3b層・3c層出土土器→家ノ後遺跡第1群土器→家ノ後遺跡第3群土器・道地Ⅲ遺跡FⅡ-9住居跡一括出土土器→前田遺跡1号竪穴住居跡2層出土土器という変遷が考えられる。

(3) 出土土器文様の意味するもの

第1群土器のうち入組帯状文から派生した多種多様な文様は、入組帯状文の本来の姿である「縄文の充填された、沈線による区画文」という性格が変容し、解体して行く過程を示している。区画文内や文様帯を区画する横位帯状文内に縄文の代わりにキザミ目を充填する手法が盛行するのも、入組帯状文が解体して行く流れの中で最も早く現れた変化の一つとしてとらえられるであろう。そして、多様な変化形態の一つとして、区画沈線から沈線が独立し、縄文やキザミ目の充填されない沈線文も発生する。その中には入組三叉文の祖型や玉抱き三叉文もあり、次の第3群土器では入組三叉文が多くを占めるようになる。

第3群土器では入組帯状文が減少し、残存する入組帯状文も著しく変形したり、描画手法が

簡略化して粗末な印象を受けるものとなる。一方、入組三叉文は文様の主流となり、モチーフの原理は一貫してくるが、いまだ完全に定型化した文様とはなっておらず、入組部や端部の形態には多様性が認められる。

このような違いは、第1群土器が入組帯状文の解体段階、第3群土器は入組三叉文を基盤とする文様体系が構築されて行く最初の段階を表していると解釈できる。いずれも大局的にみれば後期的入組帯状文系土器から、晩期的入組三叉文系土器への過渡期の姿であるが、一方は既存の観念の解体、他方は新しい観念の構築であって、思考の方向性は正反対である。土器文様が集団の社会的承認を得ることによってはじめて広く普及し、かつ意匠が限定されてしまうものであるとするならば、集団の規制の弛緩と強化と言い換えることもできる。

晩期「亀ヶ岡土器」文様の広範囲な普及と、強い斉一性から考えれば、家ノ後遺跡第1群土器は、晩期の他の時期に比べて集団の規制よりも文様の描き手個人の創意が反映された時期、第3群土器は集団の意志がしだいに明確化し、描き手個人の思考が封じられるそれ以後の長い期間に入ろうとしつつある時期、ともいえるようか。

4 お わ り に

家ノ後遺跡から出土した膨大な量の土器の一部について、報告書作成段階でできなかった考察を試みた。そして、家ノ後遺跡第1群土器と第3群土器は、入組帯状文の後期的文様系統が、入組三叉文の「亀ヶ岡土器」の文様系統に替わる過渡期の実相を示すことが分かった。

土器論は多様な角度から行ってこそ実りあるものとなることは言うまでもない。該期の土器論には器種組成、器形、成形技法、文様帯系統などの視点が不可欠である。本稿はわずかに入組帯状文と入組三叉文のみを取り上げたもので、羊歯状文や連続キザミ目文、その他の文様には触れ得なかった。したがって土器型式を明確にしたうえでの編年的位置付けも必ずしも十分にはできなかった。今後、該期の層位的に良好な資料の増加を期待するとともに、多様な視点から研究を進める必要を感じている。

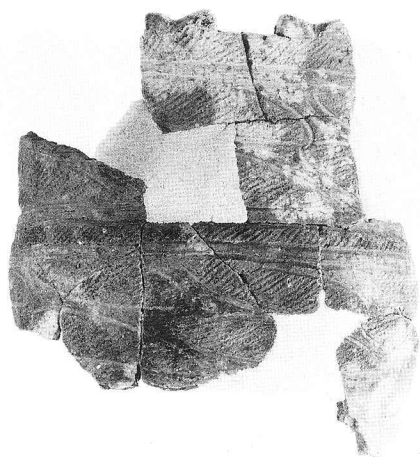
本稿に使用した写真は、小山内透氏に撮影していただいた。また、校正は高橋早百合氏に協力していただいた。記して感謝申し上げる次第である。

註

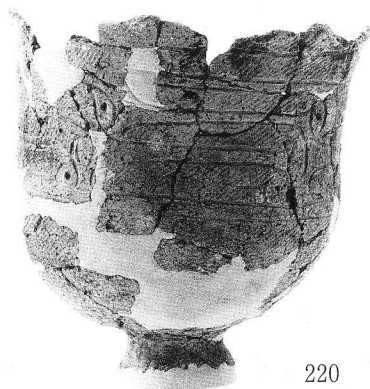
- 1 秋田県教育委員会「曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
一家ノ後遺跡一」 秋田県文化財調査報告書第229集 1992（平成4年）
- 2 安孫子昭二「瘤付土器様式から亀ヶ岡土器様式への変遷過程」 考古風土記 第5号
1980（昭和55年）
- 3 小井川和夫「宮戸島台囲貝塚出土の縄文後期末・晩期初頭の土器」 宮城史学 第7号
1980（昭和55年）
- 4 須藤隆「東北地方における晩期縄文土器の成立過程」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論
のための先史学歴史学論集』 1992（平成4年）
- 5 中村大「米代川流域における亀ヶ岡土器様式一大洞B式における文様変遷の再検討とその
地域性について」 年報・能代市史研究 第2号 1992（平成4年）
- 6 「トリミング」という考え方自体は有効である。本稿では文様モチーフのみに限定して
考察しているが、晩期初頭の土器に描かれる文様と器種の相関関係はきわめて強い。台付
深鉢の器表面で展開する入組帯状文系の文様変遷と、沈線文化した新たな意匠の台付浅鉢
や注口土器等への文様施文は同時に進行したと考える。道地Ⅲ遺跡FⅡ-9住居跡一括出
土土器はこの状況をよく表している。新しい意匠を台付深鉢の器表面から選び出し、他の
器種へ移しかえて描く行為はまさに「トリミング」である。
- 7 南東北では、北東北に比べて右下がりの入組帯状文が比較的多い。一方、中村氏も指摘
するように、入組三叉文は北東北で盛行する。このことは右下がりの入組帯状文と左下が
りの入組三叉文には強い相関があることを暗示している。本稿で解明した入組三叉文の成
立過程も、右下がりの入組帯状文と密接に関係する。
- 8 註4に同じ。
- 9 註4に同じ。
- 10 財団法人岩手県埋蔵文化財センター「道地Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書 東北縦貫自動車道
関連遺跡発掘調査」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第64集 1983（昭和58年）
- 11 註4に同じ。
- 12 須藤隆「北上川流域における晩期前葉の縄文土器」 考古学雑誌 第69巻3号 1984
（昭和59年）



33



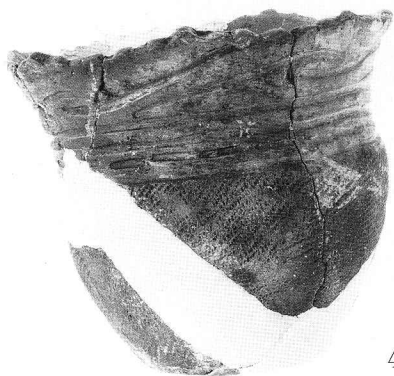
29



220



241

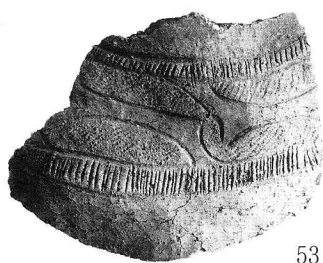


489



493

図
版
2



53



262



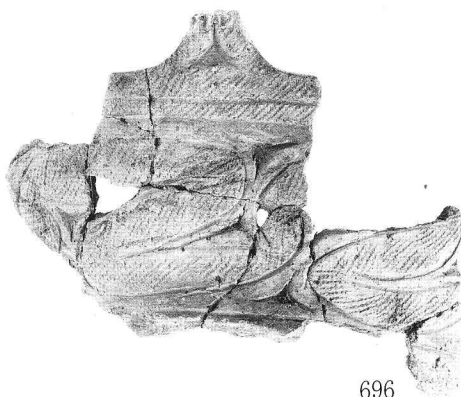
288



293



289



696



279